

前期イヴァシユキエヴィツチの散文研究

板垣賢太

ヤロスワフ・レオン・イヴァシユキエヴィツチ (Jarosław Leon Iwasz-
Kiewicz 一八九四—一九八〇) はウクライナに生まれ、ポーランドで活動
した二十世紀の小説家・詩人である。

前期、すなわち戦前・戦中のイヴァシユキエヴィツチの小説を論じた先
行研究の中でも最大のもは、リシャルド・プシビルスキによる『エロス
とタナトス』(一九七〇)であろう。プシビルスキはイヴァシユキエヴィツ
チの小説を、自然美や肉体美を生む、生を志向する力エロスと、来世や恐
怖などの抽象的概念を生む、死を志向する力タナトスの対立によって読み
解こうとする。同時代のデカダンスの作家たちが思考と具体的生活とが限
りなく分離していく作品世界を描いた一方で、イヴァシユキエヴィツチは
特に『白樺林』をはじめとする一九三〇年代前半の作品においてこの対立
を和解させ、調和を実現したと、プシビルスキは評価する。その一方で、
後に続く戦時中に書かれた悲劇的結末の比較的多い作品群においては、こ
こで達成された調和が破壊されていると指摘している。彼はこの変化の理
由を、イヴァシユキエヴィツチが第二次世界大戦の接近に伴い、同時代の
多くの知識人と同じようにヨーロッパ文化の危機と無力を意識したためと
する。

プシビルスキが主張する、調和の達成からその崩壊という筋書きは、外
国によって分割され、第一次世界大戦後に念願の独立を果たすも、第二次

世界大戦で再び悲惨な状況に陥ったポーランドの運命とも重ねられている
ように思われる。しかし、かつてのポーランド王国の辺境地帯であるウク
ライナで少年時代を過ごしたイヴァシユキエヴィツチは、独立を熱望して
いたポーランドの中心地域とは異なる世界観のもとに生きていたと考えら
れる。彼のウクライナでの体験、ワルシャワとの距離感を考慮する必要が
あるのではないか。

ポーランド独立直後、イヴァシユキエヴィツチはワルシャワへと上京す
るが、それは作家としてのキャリアの開始であると同時に、ソ連のウクラ
イナ占領による故郷の喪失を意味していた。この喪失した故郷とその探求
というモチーフは、彼の多くの作品に出現する。このモチーフを用いるこ
とで、一九三〇年代前半とそれ以降の戦時中の作品に、一貫する流れを見
出そうとするのが本論の狙いである。

まず第一章では、ウクライナを離れる前後のイヴァシユキエヴィツチの
手記や回想録の記述に見られる特徴を明らかにしようとした。回想録にお
いては、ウクライナで過ごした日々は、自然の美しさとともに幸福な思い
出として描かれている。しかし、ロシア革命の勃発後、キエフはポリシエ
ヴィキ軍に占拠されて一時戦場となる。町は破壊され、ロシア人、ポーラ
ンド人、ウクライナ人が入り乱れ戦うことになった。平和な一つの時代の
終わりの意識がウクライナのポーランド人にはあった。

一方で、イヴァシユキエヴィツチの記述にはこうした深刻さをあえて明
記しないものが散見される。友人の別荘にて、近くで戦いが起きかねない
危険な状況下で一週間を過ごす、それを彼は別荘の蔵書に囲まれた「人
生で最も穏やかな週」と描写する。またポーランド人兵士としてウクラ
イナを巡る途上では、破壊された建物にさす夕日をブルーストの美しい風景
描写になぞらえている。こうした記述では、過酷な状況が芸術や自然と結
び付けられることで美的な風景へと変わり、独立のための戦い、民族対立

といった社会的背景もまた取り除かれている。

一九一八年、イヴァシユキエヴィッチはワルシャワへ到着し、文学グループ「スカマンデル」の一員に迎えられ。しかし、初期のうちはワルシャワの文壇に疎外感を感じていた。第一には、彼に都会の詩人に対する気おくれや劣等感があつたことであり、実際に当初彼の作品は「素朴すぎで知的でない」として軽んじられることがあつた。第二には、「スカマンデル」の思想がポーランド独立という「春」の訪れを前提とした一種楽天的なものであり、その独立と同時に故郷を喪失したイヴァシユキエヴィッチにとっては、この政治上の「春」の祝祭感を共有することができなかった。彼が詠む詩は失われたウクライナの平原や川に呼びかけるものであり、故郷の状況が悪化し帰還がより絶望的になるほど、それらはより抽象的な形で描かれるようになった。

以上のイヴァシユキエヴィッチ自身の体験の記述には、破壊と美の共存、都会と田舎の対比、失われた理想的故郷、孤独といった要素がみられた。そしてこれらは、彼の詩や小説の基本的特徴にもなっていると思われる。

第二章では、これらの要素が初期の自伝的小説や詩においてどう表現されているかをみた。最初期の自伝的小説『簿記係の息子ヒラリー』では、ウクライナ⇨芸術⇨美⇨死者、ワルシャワ⇨実生活⇨猥雑さ⇨生者という対比が描かれていることを指摘した。ここでは帰れない故郷のモチーフが重要になっている。また、いくつかの詩において、美しい自然と不快な都市での生活の対比や、見出した美がまもなく失われるという予感と不安、回想によって失われた美を再現しようとする、といった特徴が共通して見られた。この「回想」には、まず空の色や花の香りといった感覚的なものを想起してから、出来事の経緯の描写に移る、という傾向がある。ここにはブルーストの影響が感じられるが、イヴァシユキエヴィッチの場合は加えて、例えばある花においては快い香りの後に泥の腐敗臭がわきあがって

くる、というように必ず美と醜いものが表裏一体をなしている。これらにより、作家が早い段階から失った故郷に関連するモチーフを作品の中に使用していたことがわかる。

第三章では、一九三〇年代前半の小説『白樺林』と、一九三〇年代後半の小説『台所の太陽』を前述の要素に着目しつつ読み、その共通点を指摘した。

『白樺林』は肺病を患いヨーロッパのサナトリウムで療養していた青年スタニスワフが死を目前にしてポーランドへ帰国し、土地の農婦マリナと関係を結んだ後、死亡するという物語である。都会的で実生活との関わりが薄いスタニスワフは、生命力にあふれる素朴なマリナと森の中で接するうちに生きる喜びを取り戻していく。この過程をプシビルスキは、実生活と抽象的なものの和解、エロスとタナトスの調和とみなして評価する。しかし、『白樺林』で描かれている二人の関係は、実際には非常にいびつで、調和とは呼び難いものである。例えば、スタニスワフの内面が大きく変化していく一方、マリナの内面が描写されることはなく、ただ肉感的な美しさが描かれるだけである。美しい木にも例えられるマリナは一人の人間というよりは「自然」や「生」の化身である。また、スタニスワフの質問にマリナは常に嘘で答え、彼が彼女の真意を知ることとは最後までない。彼の好意は一方通行である。最終的にスタニスワフは、マリナが同じ村の農夫ミハウと愛し合っていることを知る。

ここに『簿記係の息子ヒラリー』では明確に示されていた、記憶の中のウクライナと現実の灰色のワルシャワの対比から発展した構造を読み取ることが可能だろう。都会から帰ってきたスタニスワフは、兄のほかは親戚もなく、共同体とのつながりを完全に失っている。彼はマリナ⇨故郷⇨ポーランドとはいつに分かり合えず、そこでの生活に参加することもない。同時にここには、不可解性から美が生ずるというプロットも出現している。

マリナの見え透いた嘘に落胆する一方で、真意を隠そうとする彼女の様子にスタニスワフは最も魅力を感じる。マリナ「生」の謎を解き明かそうという意欲が彼に生きる力を与える。しかし謎など存在せず、マリナは一人の農婦に過ぎなかったと理解したとき、スタニスワフは再び死に向かつていく。

そして『台所の太陽』でも、これらのテーマが再び取り上げられている。これはデンマークで暮らす孤独なポーランド人イグナシアの物語で、失われた故郷や存在しない理想を探し求めるというモチーフが様々な形で出現する。イグナシアはグリーンランドへ出かけた恋人トルベンの帰りを待ちわび、家にも学校にも居場所のない少年カイも、優しい兄トルベンの姿を夢見る。やがて青年トルベンの姿は聖書の神のイメージと重なって英雄的な幻へと変質する。ある日、カイにグリーンランドへ兄をヨット一艇で迎えにいくという無謀な計画をもちかけられ、イグナシアは子供の言うことと思って安易に賛同する。しかしカイは実際に準備を整えてしまい、出発の間際になってイグナシアはそんなことできるわけがない、と笑う。絶望にくれたカイは海に身を投げて自殺する。

イグナシアがカイに言った言葉はそのまま自身に跳ね返った。それは作中では、理想Ⅱトルベンとの幸福Ⅱ聖書に示された千年王国の到来が、いずれも実現しないことを示す。これは『白樺林』においてマリナⅡ「生」と関係を結ぶことができないと知ったスタニスワフの状況と重なる。ただ、直後に病死し、最後まで「生」と完全には和解しなかったスタニスワフに対し、イグナシアは帰還したトルベンの求婚を拒否した後、ポーランド人の悪魔的な老人セルツァシュと結婚する。彼女は生きていくために醜いもの、生活を受け入れようとする。最終的にそれは失敗するが、こうした点から、『台所の太陽』は『白樺林』に劣る作品ではなく、むしろ『白樺林』を突き詰めた物語と言えるのではないか。

結論としては、イヴァシユキエヴィッチの前期の小説においては、一九三〇年代前半もそれ以後も、神秘的理想と現実の対立に翻弄されながら足掻く人間、という構造が共通しており、その原型となったのが、作家自身の故郷喪失の体験、ワルシャワでの疎外感と孤独ではないか、ということである。